

# 『スコットランド便り』(1591年) 訳註

荒川吉孝<sup>1)</sup>

要旨：以下は、ノース・ベリック<sup>1)</sup>の魔女裁判に取材した小冊子『スコットランド便り』を翻訳し、註釈を施したものである。冊子は事件の翌年にロンドンで出版されたが、被告達の裁判は出版後も続いた。翻訳の底本にはG.B. Harrison編のエリザベス朝・ジェイムズ朝四つ折り本叢書(Elizabethan and Jacobean Quartos)の中の一冊を用いた。これはスコットランドのジェイムズ六世(後の英国王ジェイムズ一世)の著した対話体の論考『悪魔学』(エдинバラにて1597年刊)と合本になった一冊で、訳者はすでに『悪魔学』も註を付し完訳している。<sup>2)</sup>『スコットランド便り』の著者は不明だが、ジェイムズ・カーマイケル<sup>3)</sup>の記録に基づいて書かれたとされている。

キーワード：ノース・ベリック、魔女裁判、スコットランド、ジェイムズ六世、ジェイムズ・カーマイケル

スコットランド便り  
著名な魔術師ファイアン博士<sup>4)</sup>の  
忌まわしい生と死について  
(1591)

いかにして彼らが  
デンマークから帰国される陛下に  
海上で魔法をかけ溺死させようとしたか、<sup>5)</sup>  
その他いまだかつて語られたことのない  
同様に不思議なことどもについて  
明らかにする

## 註記

この本文の原本はボドリーアン図書館(Douce F.210)にある。序文を除き、本文は各行ごと、各頁ごとに復元されている。原本の各頁は折記号の他に番号がついていない。訂正は施されていない。

G.B.H.

スコットランドの原稿により出版

ウィリアム・ライト<sup>6)</sup>のために  
ロンドンにて印刷

## 読者へ

スコットランド便り  
去る一月、エдинバラにて  
火刑に処せられた著名な魔術師  
ファイアン博士の  
忌まわしい生と死について  
1591年

以下の記述で正しく取り扱うあの魔女たちの忌まわしい行為と逮捕については、様々な虚言が広まっています。そのため、本書を刊行することにしました。殊に最近、それについて書かれた種々の文書が出回り、いっそう出版を促しました。そうした文書には、魔女たちが最初、トラネット<sup>7)</sup>の町へと旅する行商人によって発見されたとか、不思議にも行商人は真夜中、瞬時にスコットランドからフランスはボルドーの商人のもとへ運ばれ(その間にはかなりの距離があります)、その後、ボルドーからスコットランドへ送られ、とあるスコットランドの商人たちにより国王陛下にお目通りがかない、魔女たちのことを暴露したため逮捕につながった、などと書かれ、他にもたくさん奇跡じみた信じ難いことが含まれています。実際それはことごとく間違っています。魔女たちの告白は確かに世間の噂よりも奇怪ですが、その真相を知りたいと願う多くの正直な人たちに得心がいくよう、より一層の真実をこめて、この小著の

博士は  
数多くの悪名高い魔女たちに  
たびたびノース・ベリック教会で  
説教をした魔女の書記を務めた

スコットランド国王の御前で  
告白した博士と魔女たちの  
真実の審問を添えて

<sup>1)</sup>舞鶴工業高等専門学校 人文科学部門 教授

刊行に着手した次第です。本書は、実際に起きたすべてのこと、あの邪悪な魔女たちにより国王に対して企てられたこと、また、どのような手段でそれを行ったかということを明らかにしています。

この審問をすべて、(寛大な読者よ)私はここにありのまま公表しました。国王陛下ご臨席のもと、執り行われ、告白された通りに。願わくはその真実として受けとめられんことを。反駁の余地なく確かにことゆえ。

最近スコットランドで捕えられた様々な魔女たちの逮捕に関する真実の話。そのうちのある者は処刑され、ある者はいまだ拘留されている。

国王陛下の御前で行われた審問の詳細な説明を添えて。

神は全能の御力により、日々絶えず、被造物の幸福と存続のため配慮され見守ってくださるので、神聖な御旨（みむね）に反することなら何であれ何としてでも陰謀を企てる者たちに対し、悪行と惡意をくじかれるのである。まさにその御力により、神は最近、多くの悪魔同然の不逞な輩の邪悪な意図と振る舞いを防がれ、覆された。彼らは、自分が仕えひそかに忠誠を誓う悪魔に誘惑され、忌まわしい妖術に手を染めたのだが、長いこと学び実践したため、妖術によって他の多くの者を自分と同じほど邪悪にしてしまった。スコットランドの要地ロウジアン州に住んでいたが、陛下の主な居所もそこにあった。彼らが国王と国民、貴族と臣下に対し秘密裡に謀った唾棄すべき悪事が露見するよう、神は言葉に尽くせぬ善き御心（みこころ）から、不可思議な力でそれを明るみに出された。こうして、彼らの行いが神の法と我々が互いに抱く自然の情とに反している、ということを知らしめたのである。どのように露呈したかは以下の通り。

スコットランド王国のトラネントの町に、デイヴィド・シートンなる者が住んでいる。町の副代官を務め、ゲイリス・ダンカンという女中を雇っていた。彼女は一晩おきにそっと主人の家を空け外泊した。このゲイリス・ダンカンは、どんな病に苦しむ人も援ける行為に手をそめた。ほどなく多くの奇跡的な治療を行ったが、これまでそんなことを一度もせず、急に始めたため、主人や他の

者たちは大いに驚き怪しんだ。かくしてデイヴィド・シートンは女中に疑いを抱き、そうしたことには自然で法にかなった方法によらず、何か異常で不法な手段によってなされたのではないかと思った。<sup>8)</sup>

そのため、主人はしきりに詮索しだし、どのようにして、どんな手段で、そうした重大なことができるのか彼女に聞き質した。それに対し彼女は答えなかつたが、主人はもっとよく調べ真相を突き止めることができるように、他の者たちに手伝つてもらい、指責め具で彼女の指を責めたが、それは過酷な拷問だった。また、ひもか縄で頭をしばりひねつたが、それは残酷極まる拷問だった。それでも彼女は何も告白しなかつた。そこで彼らは、（一般に魔女がそうであるように）悪魔の印を身に帯びているのではないかと疑い、彼女の身体をくまなく探し、首ないし喉の前側に、人類の敵の印<sup>9)</sup>を発見した。それが見つかると、彼女は、自分の行為がすべて悪魔の誘惑によってなされ、妖術を用いてそれを行つたことを告白した。

この告白の後、彼女は投獄され、そこですぐに彼女は以下の者たちを名うての魔女として告発した。そのため彼らは直ちに次々と逮捕された。即ち、ハディントンに住む最年長の魔女アグネス・サンプソン。<sup>10)</sup> エдинバラのアグネス・トンプソン。ファイン博士、通称ジョン・カニンガム。この人物はロウジアン州ソルトパンズの学校教師で、その生涯と奇怪な行動についてはこの話の終わりに詳しくお聞かせしよう。これらはすでに述べたゲイリス・ダンカンによって告発された。同様に、ソルトパンズに住むジョージ・モットの妻。艇長ロバート・グリアソン。ジェネット・バンディランディス。シートンの門番の妻。ブリッグ・ハリスのスミス。ソルトパンズの近辺、また前述の区域に住む、他の数えきれない者たち。そのうちのある者はすでに処刑され、残りの者は牢に入ったまま、王命に従い下される判決を待っている。

上に述べたゲイリス・ダンカンは、ユーファム・ミーアルレアンも逮捕させた。彼女はひそかに企んで自分の名付け親を殺害し、さらには、娘に好意を寄せたからと、裁判所の判事を務める紳士に對し術を使ったのだ。また、先代のアンガス伯爵アーチボルドに魔法をかけて死なせた廉（かど）で、バーバラ・ネイビア<sup>11)</sup>なる者を逮捕させた。伯爵は妖術にかかり衰弱して死んだが、もし医者にも治し方のわからない奇怪な病で亡くなったのでなければ、妖術が疑われることもなかつたろう。だが、これまで述べた他のすべての魔女のうち、最後に話したこの二人は、逮捕されるまで、エдинバラに住む他の誰にも劣らず礼儀正しく貞淑

な女性と評判だった。リース<sup>12)</sup>に住む他の多くの者も逮捕された。彼らも陛下の御意を仰ぐまで無期限に拘留されている。魔女たちの悪事についてはこれから詳しくお聞かせしよう。それは次のようなことだった。

前述のアグネス・サンプソンなる年長の魔女は、ハリシュード館 (Haliciud house) に連行され、国王陛下とスコットランド諸侯の御前に出され、厳格な取り調べを受けた。だが、どれほど陛下が説得し、また助言しても、彼女に告白するよう仕向けることはできなかった。それどころか、自分にかけられた嫌疑をすべて頑なに否認した。そこで彼女は監獄へ送られ、最近あの国<sup>13)</sup>で魔女たちを取り調べるために用意された拷問<sup>14)</sup>を受けることになった。また、魔女と妖術をスコットランドでしかるべき審問した結果、悪魔が魔女たちに秘密の印をついていることが判明し、ついに魔女どもは、悪魔が一様に自分たちの秘部を舐め、その後、自分たちを召使いとして受け入れた、と告白した。その印は一般に魔女の身体の或る部分の毛の下に刻印されるため、たとえ探しても、簡単には発見することも見ることもできない。一般に、見つからないかぎり、印を身に帯びていても決して告白しないものだ。それゆえ、特別の命令により、このアグネス・サンプソンは全身の毛を剃られた。一方、かの国の習慣により頭を縄でねじられ激痛を覚えたが、彼女は一時間近く耐え、何も告白しなかった。ようやく悪魔の印が陰部に見つかると、たちまち彼女は詰問されたことを洗いざらい話し、前述の者たちが名うての魔女であることを証言した。

一つ、アグネス・トンプソンはその後再び国王と顧問官の前に連れ出され、魔女たちの集会と忌まわしい振る舞いについて尋問されると、万聖節の前夜祭<sup>15)</sup>に、前述の者たち、さらには他の 200 人にのぼる魔女たちと一緒にいたと告白した。証言によれば、彼らは銘々たっぷり葡萄酒の入った瓶をさげて篩 (ふるい)<sup>16)</sup> に乗り、海路、ロウジアンのノース・ベリック教会へ向かった。途中、酒を飲んでは浮かれ騒ぎ、上陸するや、手に手を取ってリール<sup>17)</sup> を踊り、声を揃えて唄を歌った。

さあさ行きな、どうぞお先に、  
いやなら、あたしが先に行くよ<sup>18)</sup>

告白によると、そのときゲイリス・ダンカンが先頭を行き、皆がノース・ベリックの教会に入るまで、ジューズ・トランプと呼ばれる小さな口琴<sup>19)</sup>でリール踊りの曲をかなでた。

この告白に国王はいたく驚き、当のゲイリス・

ダンカンを呼びに人を遣わせた。彼女は、陛下の御前に出ると、口琴で例の踊りの曲を奏した。国王は、あまりに奇怪な出来事のため、ご自身で審問に立ち会われた。

一つ、前述のアグネス・トンプソンの告白によれば、彼らがノース・ベリック教会に着くと、悪魔が人の姿をして待っており、到着がかなり遅れたため、彼らが来ると全員に贖罪行為を命じた。それは、悪魔に敬意を表し、彼の尻に接吻することであり、説教壇の手すり越しに申し渡され、一人一人、命じられた通り行なった。それから、悪魔は神を冒瀆する訓戒を垂れ、その中で、スコットランド国王に対し悪罵の限りを尽くした。ついで、彼らの善良で誠実な奉仕の誓いを受けると、悪魔は立ち去った。それが済むと、彼らは海へひき返し、家路についた。

さて、なぜ国王をそのように憎むのか魔女たちが尋ねたとき、悪魔は、国王が世界で最大の敵だから、と答えた。<sup>20)</sup> 彼らの告白と宣誓証書はすべて記録が現存している。

一つ、前記のアグネス・サンプソンが国王陛下の御前に述べた様々なことは、あまりに不思議で奇怪なため、陛下は彼らが大嘘つきだと言われた。それに対して彼女は、自分の言葉が陛下に偽りと思われる事を望まず、むしろそれを信じていただきたい、なぜなら陛下も決して疑わないようなことをこれから打ち明けるから、と答えた。

それから陛下を脇へお連れし、国王と女王がノルウェーのオスロで結婚の初夜に交わした言葉を、相手への返事も含め、そのまま告げた。それを聞いて国王陛下はおおいに驚き、地獄の悪魔がみな集ってもその言葉を明るみに出すことはできなかっただろう、と神掛けて誓われた。こうして、彼女の言葉を真実と認め、その結果、それより前になされた告白もすべてお信じになった。

アグネス・トンプソンについて言うと、彼女は悪魔の説得によって国王陛下の殺害を意図し実行しようとした唯一の女性であった。そのやり方はこんな具合だった。

告白によると、彼女は黒いひき蛙をとらえ、踵をしばって三日間吊るし、毒が滴り落ちるのを牡蠣殻で受け、たまたま毒を容器に入れ密閉した。それから、国王陛下の所持品のよごれたリンネル、例えばシャツ、ハンカチ、ナップキン、そのほか何でも、彼女はジョン・カースなる者を通じて手に入れるのを常としていたが、それが入るのを待った。この男は陛下の部屋付き従者だが、古くからの知り合いのよしみで、前述のような布を一枚融通してくれるよう頼んだところ、彼は断り、お手伝いはできないと言った。

当のアグネス・トンプソンは、逮捕後の宣誓証書によると、もし国王が身につけよごした亜麻布が手に入ったら、魔法をかけて死に至らしめ、あたかも鋭いとげか針の先に寝ているような尋常でない痛みを覚えさせたことだろう、と供述している。

さらに彼女は、以下の通り告白した。陛下のデンマーク滞在中、すでに名前を挙げた仲間たちと一緒に、猫を一匹とらえて命名し、その後、猫の体の各部に、死人の体の主な部位といくつかの関節部とを結びつけた。翌晩、その猫は、前述のように篩（ふるい）に乗って航海する魔女たちにより、海のまっただなかに運ばれた。こうして猫はスコットランドのリースの町の目の前に置き去りにされた。これが済むと、今まで見たこともないほど大きな嵐が海に起きた。この嵐が、ブラント・アイランドの町からリースの町へやってくる船の沈没する原因となった。船には、今のスコットランド女王がリースへ御幸の折、陛下に献上するはずだった様々な宝石や貴重な贈り物が積まれていた。

また、このようなことも告白した。即ち、この命名された猫が原因で、国王陛下の船は、デンマークから出て航海中、随行する他の船隊とは逆向きの風を受けた。陛下もお認めになるように、奇怪千万だが本当の話で、他の船が順風を受けているまさにそのとき、風は陛下に対し逆風で、正反対の向きに吹いていた。さらにこの魔女は、もし陛下の御信心が彼らの企みに勝らなければ、決して海から無事に出てこられなかっただろう、と断言した。

さらに、前述の魔女たちは、悪魔と一緒にいるとき彼らをどのように扱うか訊かれ、こう告白した。悪魔は、魔女たちを召使いとして受け入れ、彼らが誓いを立てたとき肉体関係を持ったが、冷たくて自分たちには少しも楽しくなかった。他の様々なときにも悪魔は同じことをした。

前記のファイアン博士、又の名ジョン・カニンガムについて言うと、逮捕後に彼の行為を取り調べたところ、悪魔の非常な巧妙さが明かになり、事件はますます驚くべき様相を呈してきた。というのも、彼は前に述べたゲイリス・ダンカンの告発によって逮捕されたのだが、彼女の告白によると、彼は魔女たちの記録係で、悪魔の読み物に近づくことを許されたのは彼を除いて他に一人もいなかった。博士は捕えられ、拘留された。そして、こうした罪のために用意され、前に述べたように他の者に与えられた、いつもの苦痛を加えられた。

先ず、縄で頭をねじられたが、そうされても何も告白しなかった。

次に、公正な手段で、自分の愚行を告白するよう説得されたが、これも不首尾に終わった。

最後に、足締め具<sup>21)</sup>と呼ばれる世界で最も激しく残酷な痛みにさらされた。三度締められた後、忌まわしい行為と邪悪な生活を告白するか尋ねられると、舌が動かず話せなかった。そこで他の魔女たちが彼の舌を調べてみた。すると、その下に二本のピンが見つかり、それが上部に刺し込まれていた。それを見て魔女たちは「ようやく魔法が解けた」と断言し、この呪文をかけられたピンのせいでの告白できなかったのだと説明した。それからすぐに足締め具をはずされ、国王の御前に連れ出されると、告白が書き留められた。その記録には自ら進んで署名した。告白の内容は以下の通り。

先ず、魔女たちの総会に彼はいつも出席した。次に、魔女の名で呼ばれ悪魔に従い奉仕する者たちに対し、彼は書記の役を務めた。次に、彼らが悪魔に心から奉仕するよう、常に彼らの誓いを書き留めた。そして、悪魔が彼に命じることを彼らのために書き留めた。

一つ、博士は、自分の経営する学校があるソルトパンズの町の近くに住む紳士を、妖術で魔法にかけたと告白した。理由はただ、自分が恋する淑女に彼も夢中になっているから、ということだけだった。魔法、妖術、悪魔の業により、二十四時間に一度、紳士が狂気に陥り、その状態が一時間続くようにした。それが本物の狂気であることを示すため、去る12月24日、博士はその紳士を国王陛下の御前に連れ出した。謁見室に入ると、彼は突然、大きな叫び声をあげ、狂気に陥った。身を屈めるかと思うと、体をぴんと伸ばして飛び跳ね、頭が天井に着くほどだったので、陛下もその場に居合わせた人たちも大いに驚いた。部屋付きの従者だけでは抑えられず、加勢してくれるものを呼び寄せ、ようやく皆で手足を縛った。狂乱状態がおさまるまで紳士をじっと寝かせておくと、一時間もたたずに正気に返った。そのあいだ何を見、何をしていたか、国王陛下に問われると、ぐっすり眠っていたと答えた。

一つ、博士はまた、前述の淑女に対し、なんとかしてよこしまな思いを遂げようと何度も試みたが、それがかなわぬと、どんな手段を用いてでも目的を実現しようと決意し、ついには呪文、妖術、魔術に訴え、望みのものを手に入れようとした、と告白した。その方法は以下のとおり。

この淑女は未婚で、弟がおり、弟は博士の学校に通っていた。博士はこの生徒を呼び、姉と一緒に寝ているか尋ねた。寝ていると答えると、そのことを利用して目的を遂げられると考え、機会をうかがい姉の陰毛を三本とつけてくれたら授業で鞭を使わない、と密かに約束した。それに対し少年は忠実に行うと約束し、すみやかに実行すると誓った。そして、手に入れたとき包めるよう、呪文をかけた紙を一枚受け取った。それから毎晩、特に姉が眠っているとき、少年は教師の目的を果たそうとつとめた。

だが、神は万人の心の秘密をご存知で、すべての邪悪で罪深い策略を明るみに出されるから、当然、この悪魔のような博士の意図が思い通りに実現することをお許しにならない。それゆえ、彼のよこしまな企みに大層お怒りであることを示すため、当の淑女をそのまま手だてとして使われた。それにより、はかりごとが最後には暴露され、白日の下にさらされることになった。というのも、ある晩、彼女が眠り、弟が一緒に寝ているとき、姉は急に叫んで母親を呼び、弟が寝かせてくれない、と言ったのだ。察しのよい母親は、ファイアン博士が何か企んでいるのではないかと強く疑つたが、それは彼女自身が魔女であったからだ。そこで、すぐに立ち上がり、博士の真意を突き止めるため、少年に問い合わせた。さらに、もっとよく知るため、何度も鞭打つと、弟は真相を暴露した。

母親は妖術に熟達していたので、博士には彼自身の術で対抗するのが一番よいと考え、少年から例の紙を受けとった。その中には姉の毛だけを入れるはずだったが、まだ仔を産まず、雄牛とつがいになってもいない若い雌牛のところへ行き、大ばさみで乳房から毛を三本刈り取った。彼女はそれを紙に包み、少年に渡して先生のところへ持っていくように命じると、彼はすぐにそうした。

教師はそれを受け取ると、本当に乙女の毛だと思い、直ちにそれに術をかけた。ところが、目論見を実行した途端、毛の持ち主だった雌牛が教師のいる教会の戸口に現われ、堂内に入ってきた。雌牛は教師の方へ向かい、飛び跳ね、躍つつきまとい、彼を追って教会を出、行くところどこへでも後を追い、ためにソルトパンズの町の人にはみなとても驚き、それを見た通りすがりの多くの者たちも同様であった。

その知らせを伝え聞いたすべての人は、博士が悪魔の力でそれを行ったのだと想像した。悪魔の助けなしに、それほど見事に実行できることは有

り得なかっただろう。その結果、(まだとても若かったが) ファイアン博士の名前はスコットランドの人々に広く知れ渡り、暗黙の裡に、すぐれた魔法使いとみなされた。

こうしたことをみな彼は初め否認し、自白しようとしたが、足締め具の苦痛を感じ、(前述のように魔法も阻止され,)それを裏づける証拠を提出しなくとも、先に述べたことをすべて真実であると告白した。その直後、国王陛下の御前で自白に署名し、それは真実の証しとしてスコットランドの記録に残っている。

すでに述べたように、ファイアン博士、別名カニンガムの宣誓証書と審問とが自身の手で自発的に書き留められると、彼は牢獄の管理者から守衛に委ねられ、独房をあてがわれた。そこで悪の道を捨て、これまでの生活の罪深さに気づき、悪魔に誘惑された結果、愚かにも呪文、妖術、魔法、魔術等に手を染めたことを自ら悟った。そして彼は悪魔とその邪悪な業と手を切り、その邪悪な業から足を洗い、キリスト教徒の生活を送ることを誓って、神と新しく結ばれたように思われた。

彼と話した翌日、彼は悪魔が前の晩に現われたことを認めた。黒ずくめの服装で、白い杖を手に持ち、悪魔は彼に、最初の誓いと約束に従い、忠実な奉仕を続けるかどうか訊ねた。(そのとき言ったように) 彼は面と向かって交際を絶ち、このように悪魔に言った、「去れ、悪魔よ、去れ。私はあまりにお前の言うことを聴きすぎ、それによってお前は私を破滅させたのだ。だから今後一切、お前との縁を切る。」 悪魔は博士にこう答えた、「いつか、死ぬ前に、お前は私のものになる。」 そう言うと、(彼が述べたように) 悪魔は白い杖を折り、すぐに目の前から消えた。

こうして一日中、ファイアン博士は孤独になり、自分の魂を気づかうように思われた。神に呼びかけ、邪悪な生活を悔い改めていることを示した。それにもかかわらず、その晩、なんとか手立てを講じて牢獄の扉と独房の鍵を盗み、夜そこを開け、ソルトパンズへ逃亡した。彼がいつも居住し、最初に逮捕されたのもその町だった。この突然の逃亡を知らされると、国王陛下は、逮捕するため念入りに捜索するよう、すぐにお命じになった。また、それが功を奏するよう、全国各地に同じ趣旨の布告を出された。熱心で懸命な追跡により、彼は再び逮捕され、投獄された。国王陛下の御前に呼び出されると、逃亡について、またその前に起きたすべてのことについて、再審問された。

しかし、この博士は、国王と顧問官たちの御前で署名した自白が記録として残っているにもかかわらず、それをすべて否認した。

そこで、国王陛下は彼の強情で頑なな態度を見てとられ、どうやら逃亡中、主人の悪魔と再会し、新たに契約を交わし、悪魔の印をつけられた、と考え、想像された。その印を見つけるため、彼の体がくまなく検査されたが、どうしても発見されなかつた。しかし、さらに審問し自白させるため、きわめて異様な拷問を課すことが命じられた。それは次のように行われた。

スコットランド方言で “Turkas” といい、イングランドでは “pincer” (ペンチ) と呼ばれる道具を用い、指の爪がすべて裂かれ抜き取られた。そして各々の爪の下に針を二本、上部まで刺し込まれた。そうした責め苦にもかかわらず、博士は少しもひるまなかつた。また、彼に加えられる拷問の苦痛にもかかわらず、自白しようとはしなかつた。

そこで彼はすぐさま足縛め具のところへ運ばれ、長時間、それを履かされたが、何度もその拷問に耐えたため、足は碎かれ押しつぶされ、骨と肉は打撲傷により血と髓がおびただしく噴き出した。そのため、両足は永久に使えなくなってしまった。こうしたひどい痛みとむごい責め苦にもかかわらず、何も告白しようとはしなかつた。かくも深く悪魔が彼の心に入り込んでいたので、すでに自状したことまで、すっかり否認してしまつたのだ。そして、前に述べ行なつたことは、すべて自分が受けた苦痛のせいだと言い、それ以上、一言も話そうとはしなかつた。

それゆえ、国王陛下と顧問官とが熟慮した結果、そのような忌まわしい犯罪者に対する適切な処罰として、また、今後、妖術、魔術、悪魔の呼び出し等、邪惡で罪深い行いに手を染めようとする者への見せしめとして、ファイアン博士はすぐに糾弾され、そのために制定されている国法に基づき、死刑と火刑を宣告された。そこで彼は台車に載せられ、絞殺された直後、予め用意された燃え上がる火にくべられた。かくして去る 1591 年 1 月末の土曜日、エдинバラ城の立つ丘で火刑に処せられた。

まだ処刑されていない他の魔女たちは、陛下の御意を受けさりに審理が行われるまで、拘置されたままになっている。

ここに述べた奇怪な話は、あるいはこれを読む者に疑念を抱かせるかもしれない。<sup>22)</sup> そのため、国王陛下が御身と国家とを危険にさらさぬよう、悪名高い魔女たちにあえて接見されることなどない、と読者は推測するだろう。こうした懸念は確かにもっともなことである。しかし、それに対しては、一般的にこのようにお答えすれば十分であろう。まず、国王は神の子であり、神に仕える方

であるのに対し、魔女たちが悪魔の召使いにすぎないことはよく知られている。陛下は主なる神により塗油されているのに対し、彼らは神の怒りの器<sup>23)</sup>である。陛下は真のキリスト教徒で、神をお信じになっているのに対し、彼らは悪魔だけを信じているため、不信心者にも劣る。悪魔は日毎、彼らに仕えるが、やがては彼らを完全に破滅させてしまう。このことにより、陛下は大胆で勇敢な心の持ち主で、彼らの魔法を恐れず、神が共にいます限り誰が敵対しても恐れない、と堅く思い定めているように思われる。そしてまことにこの話全体は、全能の神の不思議な摂理を明らかにし、もし神の無限の力と御加護がなければ、陛下は決してデンマークからの航海を無事生きて帰国されることはないに違いない、ということを示している。したがって、彼らがどこで陰謀を企もうと、海でも陸でも神が陛下をお守りくださることは疑いの余地がない。

## 註

1) ノースベリック North Berwick はスコットランドの旧州 East Lothian にある海辺の町で、エдинバラの北東 40km に位置する。そこの教会 St Andrew's Auld Kirk で魔女たちの集会があったとされたため、彼らはノースベリックの魔女たちと呼ばれる。妖術の廉で East Lothian の約 60 名の男女が起訴された (*Dictionary of National Biography (DNB)*, “North Berwick witches” 参照)。

2) 2001 年から 2012 年にかけ、「『悪魔学』(1597 年) 訳註」という通しの題名で『ノートルダム清心女子短期大学論叢』(第 23 号、24 号) と『舞鶴工業高等専門学校紀要』(第 40 号、43 号、46 号、47 号) に計 6 回、翻訳と註釈を掲載した。その折の底本にも Harrison 版の本文を使用した。

『悪魔学』執筆の動機としては、「読者への序文」に記されているように、「悪魔の忌まわしい奴隸、即ち魔女と魔法使いが蔓延していること」、そしてスコット (Reginald Scot) の『妖術の暴露』(*The Discoverie of Witchcraft*) 等に反駁し、魔女は存在するという考えを公けにすることが挙げられる。それに加えて、国王自らノースベリックの魔女裁判に立ち会つたことも背景をなしており、この魔女たちについては『悪魔学』の中でも言及されている。

3) ジェイムズ・カーマイケル James Carmichael (1542/3-1628) はスコットランド国教会（聖公会）の司祭。ハディントンで聖職に就き、イングランドに移り住んだ三年間を除き、半世紀以上、その地で司牧に従事した (DNB)。Haddington もしくは Haddingtonshire は East Lothian の古称。

ノースベリックの魔女裁判とカーマイケルについて  
は Sir James Melville, *Memoirs of his Own Life*, Edinburgh,  
The Bannatyne Club (1827), pp. 395-97 参照。特に 395 頁  
に次の記述がある。

「この国のかく多くの男女のなかから、特に彼ら  
に対し悪魔が用いた策略と悲劇とは、後世の人々に到  
底信じてもらえない。それに関し、ハディントンの聖  
職者ジェイムズ・カーマイケル氏は彼らの経験とすべて  
の宣誓供述書を所有している。」

4) ファイアン博士 ファイアン博士 (Doctor Fian) は  
John Cunningham の通称。東ロウジアン (East Lothian)  
の学校教師で、魔術師と噂され、ノース・ベリック魔  
女裁判に於いて、事件の首謀者として 1591 年 1 月 27  
日 (土曜日) に処刑された。

5) いかにして彼らがデンマークから帰国される陛下に  
海上で魔法をかけ溺死させようとしたか

1589 年、ジェイムズ六世はデンマークの王女アンと  
婚約した。アンはスコットランドへ航海の途中、嵐の  
ため引き返したので、ジェイムズはアンを連れてくる  
ためデンマークへ航海した。スコットランドへの帰路、  
船団は嵐に襲われノルウェーまで戻り、嵐がおさまる  
のを待った。その際、ジェイムズを乗せた船が最も難  
航し、妖術が原因だとみなされた。その頃スコットラ  
ンドでもゲイリス・ダンカンの治療行為に妖術の疑い  
がかけられ、自白により次々と妖術の被疑者が検挙さ  
れた。こうして魔女の集会と国王弑逆の陰謀が告白に  
より浮かび上がり、嵐を起こす妖術と結び付けられた。  
Paul McCarry Kidd, *King James VI and the Demonic  
Conspiracy* (MPhil Thesis in History, Univ. of Glasgow,  
2004) の 36 頁以下に詳しい。

6) ウィリアム・ライト William Wright はエリザベス朝  
のロンドンで活躍した出版業者 (stationer)。

7) トランエント 原文では Trenent と綴られるが、DNB  
は Tranent と綴り、次のように記している。「実は、魔  
女狩りは主に、ファイアンが学校教師をしているハディ  
ントン州のトランエントで起きた。トランエントは、エ  
ディンバラとノースベリックの間にある内陸の村で、  
この時代の主な魔女狩りのすべてにおいて重要な役割  
を果たし、1659 年になっても、重大な事件の舞台であ  
った。スコットランドの他のどこでもそうだが、ここ  
でも、すべての社会層を横断してカトリックとプロテ  
スタントが不安のうちに共存し、飢餓や疫病一特に  
1584 年から 1588 年にかけての長引く流行一によって緊  
張が高まっていた。」(“North Berwick witches”の項より)

8) この段落は、医療に携わる女性が中世から近代への  
過渡期に魔女狩りの標的となつたことを背景としている。  
例えば、女性が行う民間医療、特に産婆術における  
自然と呪術との関係について、上山安敏は次のように  
記している。

「民間伝承にあるように、女性は自然の摂理にもと

づいて種々の薬をつくり、治療を行ってきた。…

魔女が秘薬をつくり、人を治療するという観念は、  
古い民間伝承の中に生きていた。…

… 農民たちは自然をデーモンと見て、その災いから  
免れるために呪術にたよった。出産も、大地の豊穣と  
同じように女性の胎内からの稔りであり、呪術性を帶  
びていた。産婆の魔術 (マギー) は当時の医学とは違  
い、経験の科学の側面をもつていた。」『魔女とキリスト教—ヨーロッパ学再考』(講談社学術文庫)、197~  
200 頁。

9) 印 原語は “marke” で、悪魔との契約のしるしとして  
身体のどこかにつけられると考えられた。魔女裁判  
では、いば、ほくろ、傷痕などが魔女であることの証  
拠とされた。

10) アグネス・サンプソン 原文では Agnis Sampson と  
綴られ、後に続くアグネス・トンプソンの Agnes と区  
別されている。DNB には Agnes Sampson と記され、評  
判の高い産婆で呪医だったが、ゲイリス・ダンカン  
(Geillis Duncan) により魔女として連座させられたと  
記載されている。

11) バーバラ・ネイピア Barbara Napier が一般的な綴  
りだが、原文では Barbara Naper と綴られている。アン  
ガス伯爵夫人 (Countess Angus) の侍女を務めた。本書  
では、ネイピアを逮捕させたのはゲイリス・ダンカン  
となっているが、DNB には、Agnes Sampson がネイピ  
アを告発し、ネイピアは告発されると Bothwell に援け  
を求めた、と記されている。

12) リース Lieth は、リース川 (the Water of Lieth) の  
河口に面し、エディンバラの北に位置する地域。

13) あの国 著者はイングランドにいるため、スコット  
ランドを “that country” (かの国) と呼ぶ。

14) 拷問 Christina Larner によると、ローマ法の継受さ  
れている地域に魔女裁判が集中し、1649 年から 61 年に  
ピークを迎えるスコットランドの魔女裁判は、ドイツ  
諸国やロレーヌ王国と並び、ヨーロッパで最も過酷だ  
った。Larner, *Enemies of God* (1983; rpt., Edinburgh, John  
Donald, 2000), p. 197. 拷問について、彼女は次のように  
述べている。

「拷問の目的は罰を加えるためか、罪の告白もしく  
は他人の犯罪に関する情報を引き出すためであった。  
この点でも、他の法律問題と同様、スコットランドの  
訴訟手続きはイギリスと大陸との中間に位置するよう  
だ。イギリス人は公式には拷問を非難し、実際の手続  
きはいくらか異なっていたが、確かに拷問が不法である  
ことによって抑制されていた。ローマ法は拷問を當  
然のこととしていた。もっとも、実際には多少の曖昧  
さがあつただろうし、それがスコットランドでの拷問  
の使用にもつきまとっていた。

スコットランドには多くの標準的な拷問器具があつ  
たが、異端審問で用いられ正式な器具とされた拷問台

(rack) はなかった。そして常に、拷問が望ましいか、また有効であるかについて、不安があった。」(同書、107 頁)

15) 万聖節の前夜祭 原文では Allhollon Euen と綴られている。いわゆるハロウィーンのことで、万聖節（諸聖人の祝日 All Saints' Day）の前夜（10月31日）を意味する。Hallowe'en は All-hallow-even (All Hallow Even, 即ち All Saints' Eve) の短縮形。All-hallow (=All Saints) は、OED によると、古英語の *hālgena* (複数主格) に遡る。後ろに day などを伴う場合の複数属格の異体として、OED は halwene, halwen, halowen, hallowen, hallown, holland 等とともに hallon と hollan を挙げている。

16) 篩 (ふるい) 原語は “a Riddle or Ciuē”で ciue は sieve の異体。“riddle”は目の粗い篩。シェイクスピアは悲劇『マクベス』(Macbeth) の中で魔女に次の台詞を語らせている。

But in a sieve I'll thither sail,  
And like a rat without a tail  
I'll do, I'll do, and I'll do. (1.3.7-9)

まあいい、篩 (ふるい) に乗って一飛びお見まい申しあげるさ、尻尾 (しっぽ) なしの鼠 (ねずみ) に化けて、やっつけてくれる、ええい、やっつけずにおくものか、やっつけずに。(福田恆在訳。新潮文庫版から引用し、振り仮名は括弧に入れた。)

Briggs は、篩 (sieve) に乗ることを特にスコットランドの魔女の習慣と考え、それをシェイクスピアは『スコットランド便り』から学んだのかもしれない、と述べている。K. M. Briggs, *Pale Hecate's Team* (London: Routledge and Kegan Paul, 1962), pp. 79-80.

17) リール スコットランドの舞踏(曲のこと)。OED の初出例は 1585 年。普通 reel と綴るが、reill の綴りもあり、原文では reill となっている。

18) 原文の歌詞は次の通り。

Commer goe ye before, commer goe ye,  
Gif ye will not goe before, commer let me.

“commer”は OED によると廃語で、comer に由来し、comer も廃語で cummer に遡る。“cummer”は『ランダムハウス英和大辞典』(以後、RH)によればスコットランド方言で、女(の子)(woman, girl)、魔女などの意味がある。中期英語の commare (代母)に由来し、後期ラテン語 *commāter* に遡る。“*commāter*”は *com-* (共に) と *māter* (母)から成り立つ。“gif”もスコットランドや北イングランドの方言で、if と同じく古期英語の *gif* に由来する。

19) 口琴 原語は Trump. スコットランド方言で、Jew's trump の意味がある。これは、Jew's harp とも言い、「馬蹄形などの金属のフレームに針金を張った原始的な弦楽器；歯の間に挟み、指で弦をはじいて音を出す。」

(RH “Jew's harp”) なお、『ブリタニカ国際大百科事典』によると、「口琴 [コウキン] (jew's harp)」は「世界に広く分布する竹製、木製または金属製の」楽器で、

「奏者の口腔を共鳴器として鳴らされる。」

20) 「… 悪魔は、国王が世界で最大の敵だから、と答えた。」という言葉は、王をキリスト教世界の擁護者とみなす国王観を表現している。それはまた、英國王の伝統的称号「信仰の擁護者」(Defender of the Faith, ラテン語 Fidei Defensor) を連想させる。ちなみにジェイムズ六世の祖父ジェイムズ五世(スコットランド女王メアリーの父)は教皇から信仰の擁護者の称号を与えられた。

21) 足締め具 原文では bootes と記され、鉄製の靴型拷問具を指す。

22) 以下、最後の段落は、これまでと異なり、斜字体 (italics) で印刷されている。

23) 神の怒りの器 原文の *vesselles of Gods wrath* は「ロマ人への書」(Epistle to the Romans) 9章 22~23 節で言及される「怒りの器」に由来する。“vessel of wrath”は「神罰を受くべき人々」の意味(RH)。(「ロマ書」では、すぐ前に、神を陶工に、人間を土から作られた器に喻える一節がある。) 文語訳聖書と 16 世紀の英訳聖書から引用する。

「もし神、怒をあらはし権力 (ちから) を示さんと思 (おぼ) しつつも、なほ大 (おほい) なる寛容をもて、滅亡 (ほろび) に備れる怒の器 (うつは) を忍び、また光栄のために預 (あらか) じめ備へ給ひし憐憫 (あはれみ) の器に対 (むか) ひて、その栄光の富を示さんと為給 (したま) ひしならば如何 (いか) に。」(『旧・新約聖書』日本聖書協会、1972 年。引用に当たり、振り仮名を減らし括弧に入れ、漢字は新漢字を使用した。)

“What and if God wolde, to shewe his wrath, and to make his power knownen, suffre with lōg pacience the vessels of wrath, prepared to destruction? / And that he might declare the riches of his glorie vpon the vessels of mercie, which he hath prepared vnto glorie?” (“To the Romanes”, 9:22-23, *The Geneva Bible*, 1560. Long “s”は short “s”で、また他の特殊な文字も可能な文字で代用。“and if”は“if”に同じ。)

“What if God, willing to shewe his wrath, & to make his power knownen, suffered with long patience the vessels of wrath ordained to destruction, / To declare the riches of his glorie on the vessels of mercie, which he had prepared vnto glory?” (“To the Romanes”, 9:22-23, *Bishop's Bible*, 1585. Long “s”は short “s”で代用。)

『スコットランド便り』の末尾で、著者はパウロの言葉を引用することにより、判決が神の摂理に沿うものであり、審問に立ち会った国王が神の意志の代行者であることを示し、裁判を権威づけようとしている。それは、一方では、当時の終末論を背景とした魔女裁判に対する信念の表明とされるが、見方によっては、裁判に対する疑惑や不安を払拭しようとする姿勢の現

われと解釈することもできる。

## 参考文献

### I. 一次資料

King James the First, *Daemonologie* (1597) / *News from Scotland* (1591), ed. G. B. Harrison. New York: Barnes & Noble, 1966.

### II. 二次資料

上山安敏『魔女とキリスト教—ヨーロッパ学再考』講談社学術文庫、1998 年。

シェイクスピア『マクベス』福田恒在訳、新潮文庫、1969 年。

『旧・新約聖書』日本聖書協会、1972 年。

Bible in English (Versions of the Bible):

*Bishops' Bible*. London: 1585; 1st ed., 1568.

*Geneva Bible*. A facsimile of the 1560 edition.

Briggs, K. M. *Pale Hecate's Team: An Examination of the Beliefs on Witchcraft and Magic among Shakespeare's Contemporaries and His Immediate Successors*. London: Routledge and Kegan Paul, 1962.

Davidson, ed. *The New Bible Commentary* [Second Edition]. London: The Inter-varsity Fellowship, 1954.

Kidd, Paul McCarry. *King James VI and Demonic Conspiracy: Witch-hunting and anti-Catholicism in 16c. and early 17c. Scotland*. MPhil Thesis in History, Univ. of Glasgow, 2004.

Larner, Christina. *Enemies of God: The Witch-hunt in Scotland*. 1983; rpt. Edinburgh: John Donald, 2000.

Melville, Sir James. *Memoirs of his Own Life*. Edinburgh: The Bannatyne Club, 1827.

Scot, Reginald. *The Discoverie of Witchcraft*. 1584; rpt. London: Elliot Stock, 1886.

Shakespeare, William. *The Complete Works*. Edited by Stanley Wells and Gary Taylor. Oxford: Clarendon Press, 1988.

Thomas, Keith. *Religion and the Decline of Magic: Studies in Popular Beliefs in Sixteenth- and Seventeenth-Century England*. 1971; rpt. Penguin Books, 1973; 1991.

(2016. 12. 16 受付)

## NEWS FROM SCOTLAND (1591) A JAPANESE TRANSLATION WITH NOTES

Yoshitaka ARAKAWA

**ABSTRACT:** This is a Japanese translation of *News from Scotland* (1591), a pamphlet based on the trials of the so-called North Berwick witches and published in London a year after the incident. The trials of the accused continued after publication. The translation is based on the text in “Elizabethan and Jacobean Quartos” edited by G. B. Harrison. In the series, the pamphlet is paired with King James’s *Daemonologie*, a treatise in dialogue form published in Edinburgh in 1597, of which I made a complete translation with notes. *News from Scotland* appeared anonymously, but is considered to have been based on the event recorded by James Carmichael.

**Key Words :** North Berwick, witch trial, Scotland, James VI, James Carmichael